

〔一般論文〕

分断された国家の歴史学のゆくえ

— ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史学史概観 —

米 岡 大 輔

はじめに

近代以降のヨーロッパにおいて歴史学は、国民国家体制の成立・発展に伴い、国民意識の萌芽を促し、国家の正統性を支える役割を担わされてきた。その中で今日の東欧諸国では、社会主義時代の終わりとともに民主化された国家に相応の歴史学が求められている。そこでは、社会主義体制下で否定的に評価されてきた過去の出来事や人物の見直しに加え、これまで看過されてきた史実の発掘が活発化する一方、国民間での歴史認識の軋轢も生まれている¹。

こうした新たな国民史の創造とも言える試みをめぐり固有の難解な課題に直面しているのが、バルカン半島北西部のボスニア・ヘルツェゴヴィナ²である。バルカン史家クリスティアン・プロミッツァーは、ボスニアにおける歴史学の現状をいみじくも次のとおり指摘する。「ボスニアの歴史学というのは論理的には存在しえない、なぜならボスニアは1つの国民国家ではなく、3つの国民、すなわちボシュニャク人、セルビア人、クロアチア人から成る1つの国家であるからだ」と³。

ボスニアは他のヨーロッパ諸国と異なり、近代から今日に至るまで1つの独立した国民国家としての歴史を歩んでこなかった地域として知られ

る。中世に王国を築いたこの地域は、15 世紀後半からオスマン帝国の支配下に約 400 年間もおかれ、1878 年 7 月のベルリン条約締結後にはハブスブルク帝国の占領下に入った。その過程で正教徒のセルビア人、ムスリム、カトリックのクロアチア人の混住も進んだ。1914 年 6 月 28 日に起きたサラエヴォ事件を機に第一次世界大戦が勃発し 1918 年に終結をむかえると、セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国（1929 年にユーゴスラヴィア⁴王国に改称、以下いずれもユーゴ王国と略）の一部を構成した。その後は、ナチス・ドイツの勢力拡大に伴い 1941 年に誕生した傀儡政権のクロアチア独立国に入るが、第二次世界大戦終結後にはユーゴスラヴィア連邦人民共和国（1963 年にユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国と改称）の一部となった。

1990 年代のユーゴ内戦に伴い独立を果たした今日のボスニア⁵は、1995 年 12 月に調印されたいわゆるデイトン合意を基本としており、その最たる特徴は民族の分断を前提とした国家体制にある。まず国際社会により、ボスニア外から任命された上級代表とその事務所が設置され、そのポストはデイトン合意履行の監督者の役割を担う⁶。他方、国家としては、その一体性は維持されつつも、スルプスカ共和国とボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦という 2 つの政体が形成され、各政体が司法、教育、治安など内政的自治を大幅にもつ。さらに、主にボシュニャク人とクロアチア人からなるボスニア連邦には、両民族の居住領域に沿い画定された 10 の州（カントン）が設けられ、各州は内政面で独自の諸政策を実施することが可能とされる。また、こうした民族間の関係に配慮した行政の仕組みは、二院制の議会に加えて、国家元首の職務を担う大統領評議会にも見られる。大統領評議会は、ボスニア連邦のボシュニャク人とクロアチア人、スルプスカ共和国のセルビア人、それぞれから選出された 3 名から構成され、任期は 4 年である（2 期を超えての再任は不可）。得票が最も多かった者が評議会議長となり、以後は 8 ヶ月ごとに輪番で議長をつとめ、議長は国際的場面

におけるボスニアの国家元首としての任務を遂行する⁷。

本稿の目的は、以上の歴史的背景を踏まえて、長きにわたり多様な宗教・民族の人びとが暮らすボスニアの環境から歴史学の在り方がいかに形づくられ今日まで変遷してきたのかを論じることである。東欧諸国のうちボスニアの史学史に関しては特定の時代・主題を扱うものはすでに一定数見られるが⁸、本稿では、主に近代以降のボスニアの歴史を通時的に見ながら、各時代の国家や政治との関わりの中で歴史学の特色を浮き彫りにしていく。それは、国民国家体制下で培われてきた歴史学の歩みとは異なる様相を示すという点で、東欧ひいてはヨーロッパにおける史学史をより多角的な視点から捉え直す試みとなるであろう。

1、複数のボスニア史

1、南スラヴの土地

6世紀末から7世紀初頭にかけてスラヴ人の定住が進んだボスニアでは、その後ハンガリー王国やセルビア王国により侵略される中、統一権力がしばらく現れず、14世紀後半にようやく王国が成立した。ところが15世紀後半になるとオスマン帝国の支配がおよび、以後ボスニアは400年以上オスマン治下に組み込まれた。そのためオスマン支配以前のボスニアに関してはこれまで、王制や宗教制度の在り方などを検証可能な史料が限定的だと指摘されており、今日でもなお「ボスニア教会」をめぐる論争が続いている⁹。

オスマン治下のボスニアでは、行政・司法・軍事制度などの整備が進むにつれ、地元の住民によるイスラムへの改宗が漸進的に進んだ¹⁰。その結果、正教、イスラム、カトリックといった宗教共同体を基軸とする社会構造が形成され定着した。こうしてオスマン統治期のボスニアについては、統治者側の多岐にわたる文書が残存すると同時に、教会や教育施設の拡大

を通じて育った聖職者らが史実を叙述する役割を担うようにもなった¹¹。

19世紀に入るとバルカン諸地域では、オスマン帝国からの分離・独立を目指す政治的動きが徐々に生起し始めた。それに伴い各地の民族内では、西欧に倣って国民史の創造が目指されるようになった。オスマン支配時代を否定的に評価し、国家や国民の発展を主題とする歴史が求められたのである。そしてそれはやがて、20世紀のバルカン各国に通底する特色として定着していった¹²。

そうした中で、1830年にオスマン帝国から自治を得たセルビア公国やハンガリー内のクロアチアでは、南スラヴ人の住む一地域としてボスニアへの学問的な関心がもたれるようになった。そこでは、ボスニアの歴史に関して、長らく続くオスマン支配下での社会的停滞やキリスト教徒への圧政を強調する説明がたびたび見られた¹³。ボスニア出身のフランシスコ会の作家イヴァン・フラニョ・ユキチは、そうした影響下で言論活動に従事した代表的人物として知られる。彼は、1851年にザグレブで刊行した著作『ボスニアの地理と歴史』で、南スラヴ人の暮らすボスニアの地理・歴史に関連する情報を整理した。その際、中世ボスニアの宗教に関しては、すでにカトリック教徒内で知られていた説に従い、カトリックや正教に加えて、異端派のボゴミールの影響が見られたと唱えた。さらに現状としては、ムスリムたるトルコ人が政治・司法面で権力者である一方、キリスト教徒は「奴隷 (robovi)」である、という見方を提示した¹⁴。彼の著作は、ベオグラードやザグレブでも一定の評価を得たが、ボスニアのオスマン当局は彼を政治的脅威とみなして投獄し、ボスニアから追放した¹⁵。

2、歴史をめぐる齟齬

ボスニアにおける歴史学の大きな転機となったのは、1878年からのハプスブルク帝国の支配期であった。なぜなら歴史学が、統治者にとっては支配の正当性を支える方策の一部となった一方、内外の諸民族にとっては

それへの順応や反発を示す営みとされたからである。

ハプスブルク治下のボスニアでは、セルビア人とクロアチア人がそれぞれ、正教とキリル文字、カトリックとラテン文字といった宗教的・文化的伝統を保持しており、それらを通じて、1878年にオスマン帝国から独立したセルビア王国、あるいは1868年にハンガリー王国内で一定の自治を得たクロアチアと政治的関係を取り結びつつあった。1882年から1903年までボスニアの統治者となった共通財務大臣¹⁶のカーライは、そうした関係を断つべく、「ボスニア主義」という統治理念に基づく諸政策を実施した。それは、ボスニアに住む正教徒のセルビア人、ムスリム、カトリックのクロアチア人といった分化した民族意識をこえて、ボスニアという地域に根付く帰属意識を芽生えさせようとするものであった。そのため彼の統治期には、公用語として「ボスニア語」という名称が使われたり、小学校でボスニアの歴史や地理の授業が導入されたりした¹⁷。さらに、住民に共有されるべき地域独自の歴史的伝統を掘り起こそうと、1888年にはサライエヴォに州立博物館が創設され、中世の墓石など文化遺産の収集にむけた地質学・考古学・歴史学の研究が奨励された¹⁸。

カーライは、ボスニア住民のうち特にムスリムがボスニア主義の支えとなる存在と考えた。彼の理解によれば、ムスリムはボゴミール派の特権的な貴族層に由来する集団で、イスラムには改宗したがトルコ人でもオスマン人でもなかった。彼らは、セルビア人やクロアチア人と同じ言語を話す南スラヴのボスニア人なのだった¹⁹。

ボスニア主義に基づく諸政策は、帝国治下で西洋的な教育を受けたムスリムの知識人層に一定の影響を及ぼした。その代表的な人物が、サフベト・ベグ・バシヤギチである。1870年生まれの彼は、サライエヴォのギムナジウム卒業後、さまざまな言論活動に従事するかたわら、ウィーン大学に留学し1910年に博士号を取得した²⁰。彼が編集を指導した機関紙『オグレダロ（鏡）』（1907年5月から8月まで刊行）では、ボスニアの歴史

に言及した複数の論説において、ムスリムが、中世のボゴミールと貴族層に由来することを踏まえて、ボスニアの歴史的固有性をもつ集団であると唱えられた²¹。

ボスニアではハプスブルクの統治体制が整備・強化されるにつれ、個々の民族による政治活動が活発化し、セルビア人とクロアチア人それぞれの間では、ボスニアに暮らす住民が自民族に属し、領土としても自民族のものだと唱える声が聞かれるようになった²²。こうした彼らの言動は、ボスニアの歴史を国民史の文脈で捉えようとするセルビア王国とクロアチア内の各々の動向に支えられていた。特に、1908年10月にハプスブルク帝国がボスニア併合を宣言すると、それがさらに促された。セルビアの歴史家スタノイェ・スタノイェヴィチは、1909年にベオグラードで『ボスニア・ヘルツェゴヴィナの歴史』を刊行し、その冒頭で、併合により「2つのセルビア人の州」をめぐる関心が高まったと述べたうえで、古代から1908年までのボスニアの歴史を回顧する。その中で、ハプスブルクは占領以後、ボスニアのセルビア人がセルビアやモンテネグロと一体となるのを警戒してきたと説き、両国の全民族はボスニア併合に対して国家の権利を求めており、その「暴力的な強奪」に戦争も準備し始めていると主張した²³。他方、クロアチアの歴史家フェルド・シチチは、1908年にザグレブで刊行した著作『併合時のヘルツェグ - ボスナ』において、ボスニアがクロアチア、スラヴォニア、ダルマチアと1つの国法に基づく政体を成すべきだと唱え、その証明のためにボスニアの地理、歴史、民族誌、国法の在り方を検討したのだった²⁴。

セルビアとクロアチア双方の歴史家によるこのような議論は、ボスニアが第一次世界大戦後にユーゴ王国の一部となってからも続いた²⁵。「民族自決」の理念の下、南スラヴ人の統一国家として出発したこの王国では、さまざまな学術分野を通じて諸民族の統合をはかろうとする試みが見られたが、歴史学の領域では、王国としての一つの共通した歴史を創造しよう

とする方向性より、伝統的に培われてきた民族個別の歴史叙述を保持する姿勢が優先される傾向にあった²⁶。その背景には、国家の中心的存在であったセルビア人とクロアチア人の間で政治的な主導権争いが顕在化した現実もあったと考えられる²⁷。他方ボスニアのムスリムは、国家を構成する一つの民族としては認められず、他の民族に比して弱い政治的立場におかれた。その中で、自らにふさわしい歴史の提示の仕方を模索し続けた結果、第二次世界大戦後になってようやく彼らなりの民族史をより明確に示すことになる。

それでは、第二次世界大戦終結後に誕生したユーゴにおいては、ボスニアにおける歴史学はどのような様相を見せたのであろうか。次にこの点について論じることにして。

2、ユーゴの中のボスニア

1、新たな歴史学を求めて

ユーゴ王国は1941年に入ると、ドイツとその同盟国により分割・占領された。クロアチア・スラヴォニア・ボスニアの地域にはクロアチア独立国が誕生した一方、セルビアやモンテネグロなどはドイツとその同盟国に占領・併合された。こうした状況の中でユーゴ共産党は、1941年6月の独ソ戦勃発を契機として、各地で武装蜂起を呼びかけた。その中心的役割を担ったパルチザンはティトを指導者として、民族や宗教をこえてユーゴ解放を訴えながら、徐々に自らへの支持を固めていった²⁸。ティトは、1942年11月に第1回目のユーゴ人民解放反ファシスト会議(AVNOJ)をボスニア北西部のビハチで開き、続いて翌年11月にはボスニア中部のヤイツェで第2回目のAVNOJを開催し、ここでの決議では戦後の方針として「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人、マケドニア人、モンテネグロ人の完全な同権、すなわちセルビア、クロアチア、スロヴェニ

ア、マケドニア、モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの諸民族の完全な同権」が正式に認められた²⁹。大戦後に誕生したユーゴは、この決議を基本としており、6つの共和国及びセルビア共和国に属するヴォイヴォディナ自治州とコソヴォ・メトヒヤ自治区からなる、社会主義体制を敷く連邦制の多民族国家として出発したのである³⁰。

ユーゴでは、他の東欧諸国と並び、マルクス主義の影響下で史料に基づく実証史学が重視される中、共和国ごとにさまざまな研究施設が整備されていった。ボスニアの首都サラエヴォでは、1951年創設の科学協会が1966年にボスニア・ヘルツェゴヴィナ科学芸術アカデミーとして再編され、共和国内の学術全般の運営に携わるようになった。さらに、1949年に創立したサラエヴォ大学哲学部には歴史部門が設けられ、1959年にはサラエヴォで労働運動史研究所（のちに歴史学研究所へ改称）が活動を開始し、定期的に学術雑誌や単行本を刊行した。また1950年には東方研究所が創設され、バルカン半島内でイスラム史・オスマン帝国史研究の中心的な役割を果たした。これらの施設は、1990年代の内戦の影響で組織形態などを変えながらも今日なお活動を継続している。他方、ボスニア北部のバニャ・ルカでは1979年に創設された歴史学研究所が内戦に伴い活動を事実上停止したものの、今日ではスルブスカ共和国の中心都市として新たな組織が歴史学研究を牽引している³¹。

こうした流れと並行してユーゴでは、国内の諸民族の史実を総合する歴史叙述も目指されていった。1953年には全800頁超の『ユーゴスラヴィア諸民族の歴史』の第1巻（14-15世紀まで）が、続いて1960年には全1400頁超の第2巻（15-18世紀まで）が刊行された。その特徴は、各巻において執筆者及び編集協力者としてユーゴ各共和国の歴史家が名を連ねた点にある³²。その後1972年には、ヴラディミル・デディエール、イヴァン・ボジチ、シマ・チルコヴィチ、ミロラド・エクメチチの4名の共著『ユーゴスラヴィアの歴史』が刊行され、内外に大きな反響を呼んだ³³。

1950年代から1960年代にかけてのボスニアにおける歴史学の研究傾向は、1949年に創刊された代表的な学術誌『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ歴史家協会年報』（1990年の第40-41号が最終号）の刊行形態と論文題目の目次からおおよそ看取可能である³⁴。その特徴としてはまず、第1号から第12号までが隔年でラテン文字とキリル文字交互で、第13号から第16号、第18号はラテン文字、第17号はキリル文字で発行されている点があげられる。これは、セルビア人がキリル文字を、クロアチア人とムスリムがラテン文字を主に利用してきた、ボスニアの歴史的伝統に配慮したものであっただろう。次に著者に関しては、全経歴を把握することは困難だが、ボスニア出身者を中心として、セルビアやクロアチアなどからの歴史家も見られる。最後に論文題目については、オスマン期・ハプスブルク期関連のものがやや多く見受けられるが、中世や第二次大戦期を扱ったものも確認され、その内容は多岐にわたり、ときには近隣諸地域の歴史を主題としたものも掲載されている。他方で、セルビア人やクロアチア人といった民族名、またはイスラム、正教、カトリックといった宗教名が題目に明示されているものはあまり見当たらない。このように当時のボスニアでは、民族・宗教個別の歴史像を提示することよりむしろ、ユーゴという政治的枠組みの中で、ボスニアや周辺諸地域の新たな史実を発掘し整理することが重視されていたと言えるであろう。

2、民族史かユーゴ史か

ところが1960年代後半から1970年代に入ると、ボスニアにおける歴史学に変化の兆しが現れる。当時のユーゴでは、内政面における自由化政策が推進されるにつれ、連邦内で自治の要求や権利拡大の声が高まった一方、対外面では非同盟政策により複数のイスラム諸国を含むアジア・アフリカ諸地域との関係強化が取り組まれた。こうした情勢に呼応して政治的・社会的地位の向上を特にはかったのが、ボスニアのムスリムである。

1968年にはボスニア・ヘルツェゴヴィナ共産主義者同盟の中央委員会でムスリムが一つの固有の民族であると確認され、その後1974年制定の憲法により連邦レベルで承認された³⁵。これをうけてボスニアでは、ムスリム固有の歴史を描こうとする動きが急速に促された。ここでは代表的な人物として歴史家ムハメド・ハジヤヒチをあげておこう。彼は、1974年に発表した自著『伝統からアイデンティティ』で、ムスリムとしての固有の民族意識がボスニアでいかに歴史的に形成されてきたのかを検証した。その際、彼らの民族意識の支えとなる一要因として、従来からの説に基づき、中世のボスニアにおいてボゴミール派のボスニア教会の存在が周辺諸国の政治的影響あるいはカトリック教会や正教会からの働きかけを抑え、その信徒がのちにイスラムに改宗したという議論を展開した³⁶。他方、この頃ボスニア史研究では、民族間の意見対立が目立つようになり、1968年にはボスニア諸民族の歴史を書く計画が立ち上げられたが、最終的には頓挫し実現しなかった³⁷。

こうした中で、先に紹介した『ユーゴ史』が1972年に刊行されると、国内で多大な論争を巻き起こした³⁸。特にサライエヴォ大学教授のセルビア人エクメチチが執筆を担当した19世紀の箇所が議論の俎上に上がった。1960年に実証的な研究書『ボスニアにおける反乱：1875-1878』³⁹を著し近代史家として活躍していた彼の担当箇所に批判が集中したのである。例えば、ボスニアのムスリムの歴史家ムスタファ・イマモヴィチはまず、本書ではムスリムの歴史が無視されていると主張した。そのうえで、セルビア人やクロアチア人らよりかはいくらか遅れたとしても、19世紀にはボスニアのムスリムにもまた「民族復興期」が到来していたと述べ、「19世紀末から20世紀初頭にはムスリムもまた、宗教・教育上の自治、文芸活動、雑誌・新聞、読書室、出版社、政党、銀行、競技・歌唱・禁酒団体などを自ら有していたのだ」と唱えた⁴⁰。

ただし『ユーゴ史』をめぐる論争の勃発が、その後のボスニア史研究や

ユーゴ史研究における民族間の分断を決定づけたと考えるのは早計である。それは、1983年2月11日から12日にかけてサライエヴォで、歴史学研究所とボスニア科学芸術アカデミーとの共同で催された歴史家集会の様子からもうかがえる。1980年代に入るとユーゴでは、ティトの死去に加えて、民族間の緊張の高まりから政治危機が生じ国家の統合が揺らぎ始め、その影響はボスニアにも及びつつあった⁴¹。こうした環境の中で開かれた集会の目的は、約40年にわたり公表されてきたボスニア史研究の成果に関して、中世、オスマン期、ハプスブルク期、戦間期、第二次大戦とその後、とテーマごとに回顧して論評することだけではなく、全ユーゴ史研究の必要性を表明することと設定された。会合には、ボスニアに加えて、セルビア、ヴォイヴォディナ、モンテネグロ、スロヴェニア、クロアチアからも一定数の歴史家が参加した。開会の挨拶時にはボスニア科学芸術アカデミー副会長でオスマン史家のネディム・フィリボヴィチが、次のように述べ、現行の社会主義体制のユーゴを支える歴史学の必要性を再確認したのであった。すなわち「この会合の目的は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける歴史学が地域的に分化していく傾向を前進させることではない。ましてや、ユーゴスラヴィア史学からのボスニア・ヘルツェゴヴィナ史学の分離を目指すものでもない。また、一つの学術的・組織的な方法論によりテーマを選別するものでもない。ボスニア・ヘルツェゴヴィナの歴史学に関しては、ユーゴスラヴィア史学全体の一部にすぎず、ひいては世界の歴史学の枠内にあるものなのだ。言い換えれば、この会合は、ユーゴスラヴィア史学の必要性を認めるのに不可欠な唯一の機会であり、そこでは、学問的な観点から見て歴史学のさらなる発展を促すアイデアやテーマの新たな登場を目的として、歴史学の学問的成果が評価・整理されるだろう・・・（以下、省略）」と⁴²。

以上、1980年代前半までのボスニアでは、ムスリム歴史家による民族史の創造の試みや『ユーゴ史』の歴史叙述をめぐる論争が生じていた一方、

ユーゴという政治的枠組みの中でボスニア史研究をいかに営むべきかという課題も歴史家間で共有されていた。だが1990年代に入りユーゴが解体へと向かい、その過程でボスニアが凄惨な内戦を経験することになると、次に見るとおり、歴史学の様相は大きく変わり今日の現状へと収束していく。

3、内戦が残したもの

1、苦闘する歴史学

1980年代後半に入り東欧諸国で民主化の動きが本格化するにつれ、ユーゴにもその影響が強く及ぶこととなった。1990年には、ユーゴの共産主義者同盟の崩壊に伴い、6つの共和国で複数政党選挙が順次実施された。11月のボスニアでの選挙では、セルビア民主党、ムスリムの政党たる民主行動党、クロアチア民主同盟といった各民族に基盤をもつ政党が議会の優勢となり連立政権の形成について合意した⁴³。

この頃ボスニアにおける歴史学では、社会主義体制のユーゴという枠組みを前提としない、一共和国としての歴史叙述が徐々に志向されていた。ここでは関連する2点の研究を紹介しておこう。第一に、1990年に刊行された論集『移民とボスニア・ヘルツェゴヴィナ』である。これは、1989年10月26、27日にサラエヴォにユーゴ各地の研究者を集め、歴史学研究所と民族関係研究所の主催で開かれた集会の成果であり、その目的は、ボスニアに関係する移民史を探り、「われわれの地域」における人口動勢へのその影響を分析することとされた。集会の組織委員長は挨拶文で、本会の意義をユーゴ史の文脈におくような宣言はせず、中世から昨今までのボスニア史研究が求められている現状を説いた⁴⁴。第二に、1991年に刊行された『ボスニア・ヘルツェゴヴィナについての事実』である。プロミツァーによれば、これは複数の民族の歴史家が共著で発表したもの

で、共産主義の影響下でない形で出版された、中世から第二次大戦後までの最初のボスニア通史であった⁴⁵。

1991年6月にスロヴェニアとクロアチアの両議会で独立宣言が採択され、連邦制解体への動きが加速化すると同時にクロアチア内戦が勃発すると、それらはすぐにボスニアにも波及した。1991年12月21日にボスニアのセルビア人が独自の共和国樹立を宣言した一方、1992年2月29日・3月1日にはボスニアの独立を問う住民投票が実施された。この投票には、ほとんどのセルビア人が参加せず、ムスリムとクロアチア人が主に投票し、その結果、投票総数99%が独立に賛成した。ところがその直後からセルビア人勢力による攻撃が本格化し、ムスリムとクロアチア人もそれに応酬するにつれ、ボスニアでは3民族による紛争が繰り広げられていった⁴⁶。

内戦の展開は、ボスニアにおける歴史学の研究基盤を根幹から揺るがす事態を生んだ。1992年5月17日にはサライエヴォの東方研究所がセルビア人勢力により砲撃された。建物自体が全焼し所蔵資料の99%以上が焼失した。その中には、ボスニア語・アラビア語・トルコ語・ペルシア語の手稿史料（11世紀初期にまで起源を遡る史料も含む）、20万点以上のオスマン帝国関連の史料、海外から収集した大量の史資料、多数の図書や定期刊行物などが含まれていた⁴⁷。さらに1992年8月25日には、ボスニアの国立・大学図書館に砲弾が打ち込まれ建物が大きく損壊して、100万点以上の所蔵物が焼失し多数の貴重な史料が失われた。こうした史資料の焼失はサライエヴォ以外の都市でも生じ、例えばモスタル東部のヘルツェゴヴィナ文書館では10%ほどの文書が損なわれたと言う⁴⁸。また内戦中には各種研究施設でスタッフの移動・減少も起きた。戦争勃発当初には、前述の歴史家エクメチチがベオグラードに移るなど、多くのセルビア人研究者がサライエヴォを離れた一方、後にスルプスカ共和国の中心都市となるバナヤ・ルカでは、すべての非セルビア系職員が歴史学研究所を退職し、唯

一の研究者としてセルビア人歴史家ジョルジェ・ミキチのみがとどまった⁴⁹。

しかし内戦下の極めて過酷な環境下でもボスニアでは、歴史をめぐる学術的営みが決して途絶しなかったことは記憶されるべきである。1992年9月11日から14日にはサラエヴォで、スペインからのユダヤ人追放500年の記念行事として、ボスニアのユダヤ人の文化と歴史のための学術集会が開催された。これは、ユダヤ人追放の歴史と内戦下のボスニアで起きていた大量殺戮という2つの出来事が重なり合う悲劇的なシンボルとして捉えられた⁵⁰。さらに1993年3月19日から21日には歴史学研究所と東方研究所の共催で、サラエヴォ市誕生530年を記念する都市史のシンポジウムを開いた。包囲攻撃に晒されたサラエヴォでのこの集会では、先史時代から現代まで多岐にわたる研究テーマが扱われ、およそ70点もの研究報告がサラエヴォに暮らす全ての民族により順に実施された⁵¹。

2、バニャ・ルカ、モスタル、サラエヴォ

ボスニア内戦は、1995年11月にアメリカ合衆国オハイオ州のデイトンで開始された和平協議をへて、翌月パリで合意文書への調印が正式になされて終結をむかえた。デイトン合意後のボスニアでは、国家体制に合わせてボスニア連邦とスルブスカ共和国それぞれが科学・文化行政をつかさどるようになり、前者では特に個々のカントンがその主体的な担い手となった。その結果、財政支援などの影響から、各分野の学術運営もまたこうした行政上の仕組みに合わせて展開されるようになり、民族個別の研究活動が促され固定化していったのである⁵²。中でも歴史学は各民族にとって、過去にさかのぼりボスニアでの自らの存在を示すうえで極めて重要な学問と位置づけられ、これまで以上に洗練された個別の民族史の提示が求められていった。それでは以下では、スルブスカ共和国の中心都市バニャ・ルカ、ボスニア連邦の中心都市の1つモスタル、ボスニアの首都サラエヴォ

を順に取り上げながら、セルビア人、クロアチア人、ボシュニャク人それぞれによる歴史学の営みの特質を確認することにしよう。

ボスニア北部に位置するバニャ・ルカでは、ユーゴ時代の 1980 年代までその周辺の地域史研究が推進されていたが、内戦後にスルブスカ共和国の中心都市となると、セルビア人の研究拠点がおかれた。主たる担い手は、1975 年に創立されたバニャ・ルカ大学の哲学部や同共和国文書館のメンバーとされ、その研究活動は時にベオグラードからの支援に依拠することもあった⁵³。

こうした中で彼らの研究の大きな支えとなったのが、前述の歴史家エクメチチの存在である。彼は、1972 年刊行の『ユーゴ史』の執筆後もサラエヴォ大学教授として研究に従事していたが、内戦中にベオグラードに移り、2015 年に亡くなるまでそこを拠点として積極的な執筆活動が続けた。その過程で、スルブスカ共和国の研究者らと強固な関係を維持しながら同国での研究に貢献していった。セルビア人の立場からボスニア史をいかに語るかというエクメチチの姿勢は、ハプスブルク帝国によるボスニア併合 100 年を問い直す目的で、バニャ・ルカで 2009 年に刊行された論集の彼の巻頭論文「現代史における 1908 年ボスニア・ヘルツェゴヴィナ併合の位置」の内容からもうかがえる。彼はまず、19 世紀後半以降のバルカン情勢の中でボスニアのセルビア人が他の民族やセルビア王国とどのような関係を構築し、政治的・民族的な立場をいかに強化してきたのかを確認した。さらにハプスブルクによるボスニア併合前後の外交史にも言及したうえで、その併合と、20 世紀末のユーゴ内戦をめぐるアメリカなど西側諸国の対応に類似性を見いだそうとする。なぜなら彼の議論によれば、両者の行動はともに、ボスニアには固有の民族がいなかったため隣接するセルビアに統合されてはならないし、そうした対応が国際危機の回避となる、という動機から生じているからである。だがこれに対して彼は、第一次大戦後の通史、特に 1918 年のヴェルサイユ条約の理念を振り返り、自由を

求める人類の自然な権利として国民意識に目覚めるのはもっともなことではないかと説き、ボスニアは歴史的にみればセルビア（人）の領土に属すべきであろうと示唆したのだった⁵⁴。

ヘルツェゴヴィナ地方の中心都市モスタルは、内戦前にはセルビア人、ムスリム、クロアチア人が共存する地として知られ、歴史学に関しても三者共通の学術誌が刊行されるなどの状況にあった。しかし内戦中には、セルビア人が去るにつれ、クロアチア人とムスリムのボシュニャク人との間で激しい抗争が繰り広げられた。内戦後も両者の政治的・社会的分断が継続しており、歴史学もまた運営面やテーマで二分している。例えば大学は、ジェマル・ビーエディチ大学とモスタル大学が存在し、前者がボシュニャク人にむけて、後者がクロアチア人にむけて歴史学を教授する。さらに、モスタル大学哲学部とザグレブのクロアチア史研究所が共同で学術誌『ヘルツェゴヴィナ』を刊行している一方、ネレトヴァ・カントン下にあるヘルツェゴヴィナ文書館と同博物館もまた共同で同名の学術誌を発行している⁵⁵。

こうした環境下にあるモスタルは、クロアチアに地理的に近い位置にあるゆえ、ボスニアの中でクロアチア人の研究活動の一拠点となっており、彼らの歴史叙述では、ボスニアにおけるクロアチア人やカトリック教徒の歴史をいかに描き出すべきかという課題に眼目がおかれている。ここでは、神学者で歴史家でもあるモスタル大学教授ボジョ・ゴルジャが、2008年に刊行した『ユーゴスラヴィア王国におけるクロアチア民族』をあげておこう。本書では、20世紀初頭から戦間期にかけてのボスニアのカトリック教会が主題として扱われ、ユーゴ王国は1918年に新たな南スラヴ人の国家として創立され多様な民族・宗教の人びとの生活を守ろうとしたものの「残念ながらそれは成しえなかった！」と結論付けられる。なぜなら彼によれば、現実において政治・宗教面での主導権は正教徒のセルビア人に掌握されていたからだ。だがこの過酷な環境下でもボスニアのカトリック

教会の活動はさかんであり、サライエヴォはクロアチア民族にとってカトリックの出版活動の中心地であったと主張し⁵⁶、カトリックたるクロアチア人が歴史的にボスニアの一民族であると強調するのだった。

最後に、首都サライエヴォは現在、中心部がボスニア連邦のカントンに属する一方、東部はスルブスカ共和国に属し「イストチノ・サライエヴォ（東サライエヴォ）」と呼ばれる。歴史学の現状に目を向けると、東部に関してはバニャ・ルカと共通した傾向が見られる。他方、中心部に関しては、内戦前のユーゴ時代からの流れをくみ、歴史学研究所や東方研究所など複数の施設が存立し、さまざまな背景をもつ歴史家および学術団体が活動して多岐にわたる研究テーマに取り組んでいる⁵⁷。ただしその中で、内戦後にムスリム内でボシュニャク人という概念が深く根付くにつれ、歴史学界では2つの潮流が非常に大きな勢力となりサライエヴォ外にも拡大している。それは、イスラム史とボシュニャク人の歴史である。

ボシュニャク人とは、第二次大戦以後ユーゴでムスリムの民族的地位を強化するにあたりさまざまな活動に尽力してきた政治家や知識人が1990年代に唱え始めた概念である。1992年12月にサライエヴォで開かれた会合では、ボスニアの領土の一体性と独立性を脅かすことは、「ボスニアのムスリム（ボシュニャク人）」の肉体的・精神的脅威でもあると宣言され、続いて1993年9月27日には、ムスリムの政治家、軍人、宗教家、知識人がサライエヴォに参集し「ボシュニャク議会（Bošnjački sabor）」を組織した。その後も内戦中には、ボシュニャク人という概念が内外にむけてたびたび提示され、ムスリムがボスニア固有の民族であり、その領土も彼らに帰属すべきだという訴えが繰り返された⁵⁸。

内戦後にはムスリムであるボシュニャク人にとって、セルビア人やクロアチア人とのさらなる差異化をはかるにあたり、イスラムが改めて重要な位置を占めるようになった。ボスニアでは、最高宗教指導者レイスルウレマーの下、イスラム宗教共同体が存立しており、特にサライエヴォでは、

内戦中に破壊されたモスクの修復や新設にとどまらず、教育施設、図書館、出版社の整備など、その社会的影響力は幅広く及んでいる⁵⁹。それに伴い、ボスニアのイスラム史に関する研究も進展しており、テーマは人物史や法学史など多岐にわたる⁶⁰。その中で代表的な人物と言えるのが、イスラム学者でサライエヴォ大学教授のエネス・カリチである。彼は2011年に発表した著書『ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける20世紀イスラム思想への諸貢献』の中で、20世紀におけるボスニアのムスリム知識人のさまざまな言動を考察し、それらがイスラム思想の歴史の変遷にいかん位置づけられるのかを論じた⁶¹。

さらにこうした流れは、ボシュニャク人固有の歴史を創造しようとする彼らの志向とも連動している。その嚆矢とされるのが、前述の歴史家イマモヴィチが1997年に発表した著書『ボシュニャク人の歴史』である。内戦下でのムスリムの諸活動にも関わっていた彼は、序文でボシュニャク人の時代ごとの発展をまとめた歴史書の必要性を説き、彼らの歴史を中世から1990年代までたどる。その最たる特徴は、内外の先行研究に依拠しながら各時代の事象を新たな歴史叙述として総合しようとしている点にあらう。例えば、中世のボスニア教会がボゴミールだとする従来の説を批判的に検証したうえで、ボスニアではこの教会に限らず、正教、カトリック、フランシスコ会の信徒がオスマン帝国の進出に伴いイスラムを漸進的に受容したとする。そのうえで、セルビア人、クロアチア人、モンテネグロ人とは別に、ボスニアの国土においてスラヴ的な起源とイスラムとが融合され、ボスニアのムスリム、すなわちボシュニャク人の民族性・国民性が最終的に形成されたと唱えた⁶²。これにより、ボシュニャク人は古来より存在し、ボスニアという領土と歴史的に結びつく固有の民族だと主張したのである。本書は刊行後にさまざまな反響を呼んだが⁶³、数度にわたり版を重ねているだけではなく、近年でもボシュニャク人の歴史を主題とした他の著者らによる幾多の専門書⁶⁴が刊行され続けている状況に鑑みならば、

ボシュニャク人固有の歴史学の確立・定着を強く促したことは間違いなかろう。

おわりに

以上、本稿で見てきたとおり、今日のボスニアにおける歴史学の特徴は、内戦後の国家体制の在り方に合わせて民族ごとに大きく分断された現状にあると言える。そこでは、個々の民族に必要とされる歴史叙述の再生産が優先されるあまり、ユーゴ時代に見られたような歴史家間の活発な議論も滞り、歴史認識の擦り合わせや方法論の刷新も生じにくくなっている⁶⁵。また、国家運営において各民族の政治家の歩調がそろわない環境では、学術全般の最も重要な基盤となる財政面での諸問題も生じやすく、国際的な学術交流からも孤立する傾向が見られる。さらに、歴史学が民族ごとの閉鎖的な空間での営みとなりやすいため、歴史学研究に対する国民や社会の幅広い関心を喚起しにくい雰囲気漂っている。それが最も悲劇的な形で表出したのが、2014年2月にボスニア各地で反政府デモが発生し首都サラエヴォでも官庁舎の襲撃や放火が起きる中で、国立文書館もその標的となり大量の史料が焼失してしまった事件であった。火災から数日後に文書館を訪れた当時の大統領評議会のメンバーの一人ネボイシャ・ラドマノヴィチは、不幸なことに今回の事件が多くの市民に文書館の存在をはじめて知らせる機会になったと述べている⁶⁶。

しかしボスニアの歴史家の間では、こうした現状に危機感を抱き克服しようとする動きもまた活発化してきている。その牽引役の一人が、サラエヴォ大学教授のフスニヤ・カムベロヴィチである。彼によれば、2016年にはサラエヴォで近代史協会（Udruženje za modernu historiju、通称 UMHIS）が創設され、そこには政治と一定の距離をはかりたい歴史家が集いつつある⁶⁷。加えて、2017年からは毎年、ボスニア内外の研究者・

学生らが多数集う「ヒストリーフェス」が開催され、メディアでも広く取り上げられるなど盛況を見せている⁶⁸。これらの活動がボスニアにおける歴史学の現状をいかに変えていくかは未知数なところもあるが、多様な来歴をもつ人びとの対話に基づく新たなボスニア史の創造に結実するよう、今後の展開に期待して筆をおきたい。

* 本稿は、JSPS 科研費（20H01334、22H00706、22K00949）の助成による成果の一部である。

注

- 1 第二次世界大戦に関する記憶・歴史認識問題をめぐっては、橋本伸也編著『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題』ミネルヴァ書房、2017年。
- 2 以下では、初出の固有名詞（組織名・書籍名等）や引用箇所を除き、ボスニアと略記する。なお「ボスニア教会」「ボスニア主義」「ボスニア語」は、それら自体が固有名詞として通用しており、本稿では初出時のみカギ括弧を付した。
- 3 Promitzer, Ch., “Whose is Bosnia?: Post-communist Historiographies in Bosnia and Herzegovina,” Brunnbauer, U. (ed.), *(Re) Writing History. Historiography in Southeast Europe after Socialism*, LIT, 2004, p. 54.
- 4 以下では、初出の固有名詞（国名・書籍名等）や引用箇所を除き、ユーゴスラヴィアをユーゴと略記する。
- 5 2013年時点のボスニアの人口構成は、全人口353万1,159名のうちボシュニャク人50.1%、クロアチア人15.4%、セルビア人30.8%であった。ボスニア統計局 (<http://www.statistika.ba/?lang=en> 2024年1月23日閲覧)
- 6 歴代の上級代表とその任務の詳細に関しては、久保慶一「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ」月村太郎編著『解体後のユーゴスラヴィア』晃洋書房、2017年、68-71頁。
- 7 百瀬亮司「橋はまた架かるか—紛争後ボスニアの分裂と再建」宮島喬・若林邦弘・小森宏美編『地域のヨーロッパ - 多層化・再編・再生』人文書院、2007年、124-130頁。
- 8 註3の文献以外に、Džaja, S. M., “Bosnian Historical Reality and its Reflection in Myth,” Kolstø, P. (ed.), *Myths and Boundaries in South-East-*

- ern Europe*, C. Hurst & Co., 2005, pp. 106-129（以下、Džaja, “Bosnian”）; Juzbašić, Dž., “Die Geschichtsschreibung in Bosnien-Herzegowina im letzten Jahrzehnt des 20. Jahrhundert,” *Prilozi*, 31, 2002, pp. 17-31（以下、Juzbašić, “Geschichtsschreibung”）; Kamberović, H., “Historiography in Bosnia and Herzegovina : Between Academic Discipline and Political Activism,” *Contemporary European History*, 2023, pp. 1-9（以下、Kamberović, “Historiography”）; Okey, R., “Overlapping National Historiographies in Bosnia-Herzegovina,” Frank, T. and Hadler, F. (eds.), *Disputed Territories and Shared Pasts: Overlapping National Histories in Modern Europe*, Palgrave Macmillan, 2010, pp. 349-372（以下、Okey, “Overlapping”）. 邦語では、ニーデルハウゼン・エミル、渡邊昭子他訳『総覧東欧ロシア史学史』北海道大学出版会、2013年、があるがボスニアへの言及は限定的である。
- 9 Okey, “Overlapping”, pp. 351-352.
- 10 イスラムへの改宗に関しては、米岡大輔「バルカンにおけるイスラム受容 - ボスニア・ヘルツェゴヴィナの場合」林佳世子編『岩波講座 世界歴史 13 西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀』岩波書店、2023年、208-214頁（以下、米岡「バルカン」）。
- 11 一例として18世紀のフランススコ会聖職者ニコラ・ラシュヴァニンをあげておく。Lašvanin, N., *Ljetopis*, IRO Veselin Masleša, 1981.
- 12 佐原徹哉『近代バルカン都市社会史』刀水書房、2003年、序章。
- 13 Hajdarpasic, E., *Whose Bosnia?: Nationalism and Political Imagination in the Balkans, 1840-1914*, Cornell University Press, 2015, pp. 18-89.
- 14 Slavoljuba Bošnjaka, *Zemljopis i Poviestnica Bosne*, Bèrztiskom Narodne Tiskarnice dra. Ljudevita Gaja, 1851, p. 10. Slavoljuba Bošnjaka はユキチの筆名とされる。
- 15 Hajdarpasic, *op.cit.*, p. 40, 44.
- 16 帝国治下のボスニアは、国内の民族的均衡に配慮してオーストリアとハンガリーいずれにも組み込まれず、1つの行政単位として共通財務省下におかれた。
- 17 カーライの統治期に関しては、Okey, R., *Taming Balkan Nationalism-The Habsburg "Civilizing Mission" in Bosnia, 1878-1914*, Oxford University Press, 2007.
- 18 Džaja, S. M., *Bosnien-Herzegowina in der österreichisch-ungarischen Epoche (1878-1918)*, R. Oldenburg Verlag, 1994, pp. 80-83.
- 19 Anon., *Die Lage der Mohammedaner in Bosnien*, Wien, 1900.

- 20 バシャギチの活動全般は、Gelez, Ph., *Safvet-Beg Bašagić (1870-1934) : Aux Racines Intellectuelles de la Pensée Nationale chez les Musulmans de Bosnie-Herzégovine*, École Française d'Athènes, 2010.
- 21 *Ogledalo*, br. 1-13, Sarajevo, 1907. 本誌の考察は、米岡大輔「ハプスブルク帝国治下ボスニアの進歩的ムスリム (Napredni Muslimani) —機関紙『オグレダロ (Ogledalo)』の言説をめぐる」柴宜弘監修・百瀬亮司編『旧ユーゴ研究の最前線』溪水社、2012 年、19-42 頁。
- 22 Imamović, M., *Pravni Položaj i Unutrašnje-Politički Razvitak BiH od 1878-1914*, Bosanski Kulturni Centar, 1997, pp. 149-174; Kaser, K., *Die serbischen politischen Gruppen, Organisationen und Parteien und ihre Programme in Bosnien und der Hercegovina 1903-1914*, Dissertation Universität Graz, 1980, pp. 51-70.
- 23 Станојевић, С., *Историја Босне и Херцеговине*, Државна Штампарија Кралјевине Србије, 1909, pp. V, 87-96.
- 24 Šišić, F., *Herceg-Bosna prigodom Aneksije*, Tiskara Hrvatske Stranke Prava, 1908, p. 5. Herceg-Bosna は主に当時のクロアチア人によるボスニアの呼称とされる。またスラヴォニアとダルマチアはハプスブルク領内にあり、クロアチア人が一定数暮らす地域だった。
- 25 Okey, "Overlapping," pp. 353-362.
- 26 スロヴェニアのボジダル・イエゼルニクは「実際のところ統一後には、南スラヴ諸民族の歴史に関する書物はひとつもなかった。スロヴェニア人の歴史、クロアチア人の歴史、セルビア人の歴史のみが存在したのである」と述べる。Jezernik, B., *Yugoslavia without Yugoslavs: the History of a National Idea*, Berghann, 2023, p. 182.
- 27 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史 新版』岩波書店、2021 年、第 2 章。
- 28 同上、第 3 章。
- 29 Petranović, B. and Zečević, M., *Jugoslavija 1918-1984. Zbirka Dokumenta*, Izdavačka Radna Organizacija "Rad", 1985, p. 546.
- 30 大戦後のユーゴの歴史に関しては、Sundhaussen, H., *Jugoslawien und seine Nachfolgestaaten 1943-2011: Eine ungewöhnliche Geschichte des Gewöhnlichen*, Böhlau, 2014.
- 31 Kamberović, "Historiography," p. 2; 柴宜弘「ユーゴスラヴィア歴史研究の現状」『東欧史研究』第 1 号、1978 年、242 頁。
- 32 *Historija Naroda Jugoslavije I - II*, Školska Knjiga, 1953, 1960. 第 1 巻の序

文では、第3巻として19世紀から1918年までの時期が、第4巻として戦間期から第二次大戦とユーゴ誕生までの時期がそれぞれ主題として設定されているが、いずれも未刊である。

- 33 Božić, I. i Ćirković, S. i Ekmečić, M. i Dedijer, V., *Istorija Jugoslavije*, Prosveta, 1972. なお『ユーゴ諸民族の歴史』『ユーゴの歴史』における叙述の考察に関しては、以下も参照。百瀬亮司「歴史学と「公共の歴史」の狭間で：ユーゴスラヴィア／セルビア史学の射程と盲点」『歴史研究』大阪教育大学歴史学研究室、52号、2014年、25-31頁。
- 34 Kurtović, E., “Bibliografija Godišnjaka Društva Istoričara Bosne i Hercegovine, Sarajevo (I do XL-XLI),” *Radovi Filozofskog Fakulteta u Sarajevu (Historija, Historija umjetnosti, Arheologija)*, Vol. 7, pp. 137-180.
- 35 Bougarel, X., “Bosnian Muslims and the Yugoslav Idea,” Djokić, D. (ed.), *Yugoslavism. Histories of a Failed Idea 1918-1992*, The University of Wisconsin Press, 2003, pp. 100-114; 長島大輔「人口調査の政治性：ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人をめぐって」柴宜弘・木村真・奥彩子編『東欧地域研究の現在』山川出版社、2012年、159-182頁。
- 36 Hadžijahić, M., *Od Tradicije do Identiteta*, Svjetlost, 1974, p. 103; 佐原徹哉「ボスニアのムスリム・コミュニストにとっての宗教とネイション」酒井啓子・白杵陽編『イスラーム地域研究叢書5 イスラーム地域の国家とナショナリズム』東京大学出版会、2005年、96-99頁。今日の研究では、ボスニア教会へのボゴミール派の影響に関して疑義が呈されている。米岡「バルカン」、210-212頁。
- 37 Bougarel, X., *Islam and Nationhood in Bosnia-Herzegovina. Surviving Empires*, Bloomsbury, 2018, pp. 78-89（以下、Bougarel, Islam）。
- 38 柴宜弘「『ユーゴスラヴィア史』をめぐる諸問題—エクメチッチ・グロス論争とその背景—」『東欧史研究』第2号、1979年、43-57頁; Banac, I., “Historiography of the Countries of Eastern Europe : Yugoslavia,” *The American Historical Review*, 97-4, 1992, pp. 1090-1093.
- 39 Ekmečić, M., *Ustanak u Bosni*, 1875-1878, Veselin Masleša, 1960.
- 40 Jakšić, B., *Istorija Jugoslavije u Svjetlu Kritike : Polemike u Jugoslavenskim Časopisima* 1973-1976, Buybook, 2022, pp. 135-139. 本書は当時の書評を集成し直したものである。
- 41 当時のユーゴ情勢は、鈴木健太『ユーゴスラヴィア解体とナショナリズム：セルビアの政治と社会—1987-1992年—』刀水書房、2022年、第1章。
- 42 Filipović, N. (ed.), *Savjetovanje o Istoriografiji Bosne i Hercegovine (1945-*

- 1982), Akademija Nauka i Umjetnosti Bosne i Hercegovine, 1983, p. 8.
- 43 Donia, R. J. and Fine, Jr, V. A., *Bosnia and Hercegovina: A Tradition Betrayed*, Columbia University Press, 1994, pp. 210-211 (佐原徹哉他訳『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史』恒文社、1995年)。
- 44 Šehić, N. (ed.), *Migracije i Bosna i Hercegovina*, Institut za istoriju u Sarajevu, Institut za Proučavanje Nacionalnih Odnosa Sarajevo, 1990.
- 45 Promitzer, op. cit., p. 59.
- 46 Donia. and Fine, *op.cit.*, pp. 229-238.
- 47 Ljubović, A. i Gazić, L. (eds.), *Orijentalni Institut u Sarajevu 1950-2000*, Orijentalni Institut u Sarajevu, 2000, pp. 25-35.
- 48 Kovačević, M., “Stradanja u ratu – nastavak u miru,” *Prilozi*, 30, 2001, p. 208.
- 49 Juzbašić, “Geschichtsschreibung,” p. 23; Promitzer, op. cit., p. 64-65.
- 50 Juzbašić, “Geschichtsschreibung,” pp. 18-19.
- 51 Ibid. なおその成果は1997年に刊行された。Juzbašić, Dž. (ed.), *Prilozi Historiji Sarajeva*, Institut za Istoriju i Orijentalni Institut, 1997.
- 52 Juzbašić, “Geschichtsschreibung,” p. 21.
- 53 Kamberović, “Historiography,” p. 6; Promitzer, op. cit., pp. 85-89.
- 54 Екмечић, М., “Мјесто Анексије Босне и Херцеговине 1908. у Савременој Историји,” Кузмановић, Р. (ед.), *Стогодишњица Анексије Босне и Херцеговине*, Академија Наука и Умјетности Републике Српске, 2009, pp. 17-42.
- 55 Kamberović, “Historiography,” pp. 8-9; Promitzer, op. cit., pp. 82-85.
- 56 Goluža, B., *Hrvatski Narod u Kraljevini Jugoslaviji*, Crkva na Kmenu, 2008, pp. 271-276.
- 57 Kamberović, “Historiography,” pp. 2-5.
- 58 Bougarel, *Islam*, pp. 111-139.
- 59 イスラム諸制度全般の現状は、Alibašić, A., “Bosnia and Herzegovina,” Cessari, J. (ed.), *The Oxford Handbook of European Islam*, Oxford University Press, 2014, pp. 429-474.
- 60 一例として、Marić, I., *Husein Husaga Ćišić*, Dobra Knjiga, 2022; Karčić, F., *Shari'a Courts in Yugoslavia 1918-1941*, CNS, 2019.
- 61 Karić, E., *Contributions to Twentieth Century Islamic Thought in Bosnia and Herzegovina* 1, el-Kalem, 2011.
- 62 Imamović, M., *Historija Bošnjaka*, Bošnjačka Zajednica Kulture Preporod,

- 1997, pp. 7-17, 84-92; 佐原徹哉「ポスト社会主義期のボスニア人ナショナリズム」同編『ナショナリズムから共生の政治文化へ ユーゴ内戦 10 年の経験から』北海道大学スラヴ研究センター、2002 年、28-31 頁。
- 63 Džaja, “Bosnian,” p. 115. また批評記事は以下でまとめられている。Teronić Oruč, I., *Portret Spisatelja : Savremena Kritika o djelu Mustafe Imamovića*, University Press, 2017, pp. 67-177.
- 64 一例として、Veladžić, E., *Bošnjačka Vjerska Inteligencija Austrougarskog Perioda*, Institut za Islamsku Tradiciju Bošnjaka, 2021.
- 65 他の東欧諸国と並び近年のボスニアではサライエヴォを中心に、第二次世界大戦期から 1990 年代までの過去をめぐる議論が登場しつつある。例えば、Kamberović, H. (ed.), *Prilozi Historiji Bosne i Hercegovine u Socijalističkoj Jugoslaviji*, UMHIS, 2017. 今後は、ボスニア全体でこうしたテーマの議論自体がそもそも成立しうるのか、また、もし成立したとしてどのような争論が見られるのかを確認し、その整理と検証を進める予定である。
- 66 米岡大輔「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ文書館が燃えた日―内戦後の歩みの中で―」『歴史評論』783 号、2015 年、88-98 頁。
- 67 Kamberović, “Historiography,” p. 5.
- 68 「ヒストリーフェス」(<https://www.historyfest.ba> 2024 年 1 月 23 日閲覧)。2024 年は 6 月 4 日から 9 日まで「南東欧における統合・分裂 1914-2024」というテーマで開催予定。